

## 聖坂を登って

目指すのは、世界に向けて発信できる英語力



普連土学園中学校・高等学校

新渡戸稲造と内村鑑三の助言により、キリスト教フレンド派（クエーカー）の人々によって創立された普連土学園。  
“内なる光、神の種子”を育てることを教育理念とし、家庭的できめ細かな指導を行っている。  
伝統的に少人数授業を行っており、希望者が2～3名でも開講するなど、生徒の進路に応じた体制は万全だ。  
可能性を信じ、どこまでも付き合うこと。その思いは揺るがない。





TEEでは12名の生徒が2グループに分かれてディスカッションする

日経新聞を取り出し、今、興味のあることを語る。ウォー  
ムアップの時間。それぞれが自分の考えを述べるその表情は  
真剣ながら柔らかく自然体だ。場が温まる。いよいよ本題、  
今回のテーマである移民問題を議論する。ここでもリラック  
スした雰囲気は崩れず、互いに合いの手を積み、笑顔がこぼ  
れる。深刻な話題だからとかしこまらなからこそ、意見が  
飛び交い、議論が深まる。およそ100分間、オールイングリッ  
シユで行う。

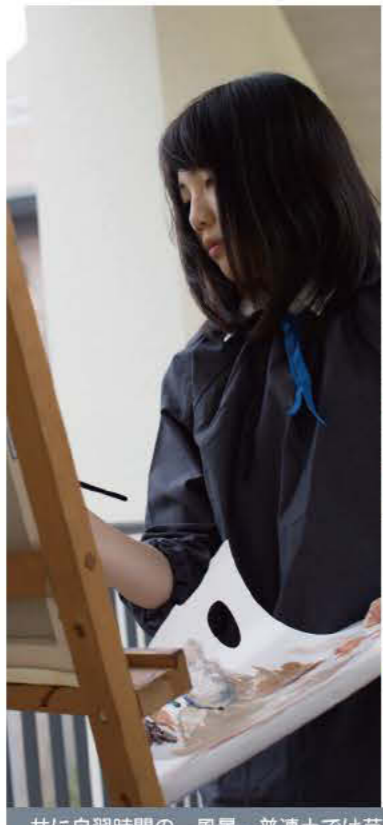
高2の選択授業であるTEE (Total English Experience)  
を担当するのは専任のネイティブスピーカーの教員たちだ。  
さまざまな言語・文化に造詣が深く、日本の教育環境を踏ま  
えた英語教育を行っている。最初は海外の昔話やマンガなど、  
易しい教材を使用します。しかし内容は発展的で、お話の裏  
側にある意味や社会事情など、隠されたメッセージもくみ取っ  
ていきます」と英語科のStifer先生は話す。TEEの目的は、  
生徒に自信をつけてもらうこと。語学力以上に、議論に積極  
的に参加する姿勢を意識しているのが特徴だ。実際参加する  
生徒たちの意欲は高く、あつという間に2時間が過ぎるとい  
う。

これを発展させたのが、高3で選択できるCCU (Cross  
Cultural Understanding)。海外大学の基礎レベルでのディス  
カッションを目標として、ポッドキャストで「TED (世界  
的講演会動画サイト)」を視聴したり、大学教授のインタビュ  
を教材に使用するなど、実践的な英語を多く取り入れている。  
これらの取り組みが軌道に乗っているのは、彼ら教員の意  
識の高さと不断の努力が背景にあるからだ。「自分たちも進化  
しなければ英語は教えられません。日本の教育書なども読み、  
教育のあり方について日々勉強しています」。新しい機器の導  
入にも積極的で、中2・3の授業ではiPadを活用している。  
S・Z (短い劇) の課題が与えられると、生徒たちはグループご  
とに撮影し提出する。これにより丁寧に時間をかけた評価が  
でき、また生徒も工夫を凝らしてより良い作品を作るなど主  
体性にも結びついている。

授業以外にも、歌・スピーチ・マンガなど、自分の好きな  
活動を選んで英語のスキルを磨くイングリッシュ・チャレン  
ジといった、全身を使って英語に触れる機会は多く、英語へ  
の興味と、そこから広がる世界の面白さを常に伝え続けている。



Stifer先生による高1 オールラコミュニケーションの授業



共に自習時間の風景。普通士では芸大・美大への進学者も毎年輩出している



礼拝で1日が始まり、クラスごとの礼拝 (終拜) で1日が終わる

### 行きたいところへ行くために 普通士流の少人数教育

こうした取り組みに加え、最難関校の問題を多数含むオリジナル教材によるリー  
ディング、ボキャブラリーテストなど、志望校突破への丁寧な指導により、昨年度  
は国公立・早慶上智・CCUへの進学率が現役生の34.6%に達し、中でも慶應に  
は22名の合格者を出した。また理系の進学率は過去5年間4割近くを維持している。  
もちろん英語教育のみならず、背景には基礎教育の充実と選択授業の豊富さがある。  
消極的な理由で進路を決めないようにとの思いから、数学は中学で分割授業とチー  
ムティーチングを取り入れ、理科は中1と高1でそれぞれ約50回もの実験を行い、  
楽しんで学ぶ習慣を作っている。そして地力をつけた後は、希望進路に向けての主  
体的な授業選択ができる。少人数授業も多く、高3では8時間まで自学自習の時間  
を取ることも可能で、1対1で教員の指導も受けられる。これら親身な体制は、生  
徒と教員の強い信頼関係が育まれているからこそなのだ。

最後にもう一つ、普通士学園に欠かせないものがある。校舎の美しさだ。赤い三  
角屋根と白を基調とした落ち着いた景観は、三田の由緒ある坂に囲まれ、牧歌的な  
情緒をたたえている。内装は木の温もりを大切に、生徒のみならず多くの人から  
愛されている。毎日の生活の場が好きだということ。これはあらゆる学びの始まり  
であり、未来への可能性を後押しする、彼女たちへの最高の贈り物に違いない。



中学校舎は2003年、日本におけるモダン・ムーブメントの建築に選ばれ、  
建築を志す学生が今も手本にと訪れる